「主イエスの名のために」　　２０２６年１１月１５日　　主日礼拝
使徒言行録　第２１章１～１６節

エフェソの教会の長老たちに別れを告げて、苦難が待ち受けるエルサレムに向かって旅立ったパウロの一行は、カイサリアで福音宣教者のフィリポの家に滞在します。このフィリポは８節で「例の７人の一人」として紹介されていますが、例の７人というのは使徒言行録６章で執事として選ばれた７人のことを指します。キリスト教の初代教会が立ち上がり、人々がたくさん増えてきたために、教会では言葉の問題が起こってきました。同じユダヤ人でありながら、イスラエルの国で話されていたヘブライ語を話すユダヤ人と、イスラエルの国の外で生活をしていたためにギリシア語しか話せないユダヤ人がいました。初代のキリスト教会では、パウロのようにユダヤ教からイエス・キリストを信じて回心した人たちが多かったのでしょう。ヘブライ語を話すユダヤ人たちが主流をなしていました。そこでギリシア語を話すユダヤ人たちから生活物資の分配のことで苦情が出てきます。私たちの国でも阪神淡路大震災や東日本大震災のように広範囲にわたって大きな地震が起こった際に、日本語がよく分からない外国の人たちがたいへん困難な状況に陥ったことが報告されています。たとえば、「避難」という漢字を見れば、私たち日本人は危険が迫っているからどこかに逃げなければならないとわかりますが、この「避難」という漢字は、避けると難しいという字から成り立っています。ですから、避難という言葉を知らない人がそのまま読みますと「避けるのが難しい」となって、何を意味するのかまったくわかりません。被災した外国の人たちは、言葉がわからなかったために、どこに逃げてよいのか避難所がわからない、避難した際の生活に必要なことが通じない、被災した後の役所の手続きの仕方がわからないなど、それはそれはたいへんなご苦労をされたことが報告されています。初代のキリスト教会でも同じように、育った地域の違いによって言葉が通じないということが起こり、ギリシア語を話すユダヤ人から日々の分配のことで苦情が出てきました。この当時は世界で通じる言葉がギリシア語でしたから、今の英語のようでした。ですから外国で生まれ育って英語しか話せない日本人が日本の国でとても苦労をするような話になります。初代教会の人たちのお世話を一手に引き受けていたのがイエス様に選ばれた十二弟子たちでしたが、彼らの本来の仕事は人々に福音を宣べ伝えることでしたので、人々の日常生活のお世話に追われると本来の仕事がおろそかになってしまいます。そこで十二使徒はすべての弟子たちを呼び集め、こう言います。使徒言行録６章２節、「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を７人選びなさい」。そして７人の執事が選び出されます。その中の一人が、今日の聖書の箇所に出てくるフィリポでした。選びだされた７人の中には殉教したステファノもいましたが、フィリポもたいへん目覚ましい働きをします。使徒言行録８章の初めの方では、フィリポはサマリアの魔術師シモンにバプテスマを授けます。また８章の後半では、イザヤ書を読んでいたエチオピアの宦官に聖書の解き明かしをしたフィリポが、彼にバプテスマを授けます。フィリポの手によって、異邦人にバプテスマが授けられたのです。こんな素晴らしい働きをしたフィリポは、そののちカイサリアに家を構えそこで福音宣教の働きを行っていたのでしょう。エルサレムに向かうパウロたち一行は、カイサリアのフィリポの家に泊まります。するとそのフィリポの家にユダヤからやってきたアガボという預言者が、パウロの帯を取って自分の手足

を縛り、こう語りました。「聖霊がこうお告げになっている。『エルサレムでユダヤ人は、この帯の持ち主をこのように縛って異邦人の手に引き渡す』」。アガボは、パウロが捕らわれに身になって異邦人の手に引き渡されることを預言したのです。それを聞いた人々、パウロと旅を共にしてきた仲間たちや、フィリポとその仲間たちは、パウロに向かってエルサレムへは行かないようにとしきりに頼みました。命の危険が迫るエルサレムに、なぜわざわざ行かなければならないのか。すると、パウロはこう答えました。「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです」。パウロが人々の勧めを聞き入れなかったので、そこにいた人たちは「主の御心が行われますように」と言って口をつぐむことしかできませんでした。

私が牧師になって最初に赴任した福岡教会は、北側に山があり、そこに西公園という大きな公園がありました。その西公園には明治の初期の頃、かくれキリシタンが収容されていました。１００名以上のかくれキリシタンが捕らえられ、廃墟となっていたお寺に収容されていたのです。その様子を記した新聞記事が残っています。

【福岡藩は新政府によく思われていなかったし自然、風当たりも強かった。そこで政府の受けをよくしておこうという配慮もあったのだろう、指令に従ってキリスト教徒を思いきりイビリあげた。食い物もろくに与えず、“干し殺しにするのではないか”というううわさもあったという。福岡藩の虐待は特にひどく、のちに信徒を山口に流すことになった時、骨と皮にやせ衰えた信徒を見て山口側が「これが人間か、こんなものを受け取るわけにはいかん」と言ったぐらいであった。明治初年、西公園にはアウシュビッツのような収容所があったのだ。】

かくれキリシタンに対して、【アウシュビッツのような】と書かれるほどの虐待が行われていました。「干し殺し」というのは干からびて殺すという字の通り、食べ物を与えないで死んでいくのを待つという非情な仕打ちでした。キリスト教の信仰を持っているというだけで、何でそのような弾圧を受けなければならないのか。

キリスト教が日本にあって弾圧を受けてきたのは、日本の政府がキリスト教を弾圧し、家の中に仏壇を持ち込むことによって人々を治めやすくしてきたことと関係があるのですが、そのように政府の主導によっているのだけではなく、元来、日本人というのは保守的な国民で変化を好まない気質があり、それが新しい宗教に対するアレルギーとなって現れてきたこともまた、キリスト教が弾圧される大きな要因だったのだろうと思われます。そしてこの変化を好まない気質は、残念ながらキリスト教の教会にも受け継がれているように思います。何ら特別な神学的理由もなく、うちの教会では昔からこうやってきましたからと言って変わることを恐れる。しかしそれでは、新しい人たちが教会に来ることは決してないのだろうと思います。

パウロが向かったエルサレム教会もまた、古くからのユダヤ教の教えや習慣を大事にしてきました。異邦人キリスト者に対しても、ユダヤ人のようになれということを強制しようとしていたのです。パウロはそんなエルサレムへと向かおうとしていました。パウロは言います。「主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです」。なぜパウロは、そこまでして主イエスの名を伝えよう

としたのでしょうか。それは、パウロがかつて、主イエスの名を迫害し弾圧した張本人だったからです。選ばれた７人の執事の一人であるステファノが殉教の死を遂げようとしていたとき、使徒言行録８章１節に記されていますように、サウロと呼ばれていたパウロはステファノの殺害に賛成していました。使徒言行録９章で、そのパウロが天からの光の中でイエス・キリストに出会い、自分が迫害していたイエスこそまことの神であるとわかったとき、目が見えなくなったパウロを助けるようにと、神様がアナニアという弟子に呼びかけます。けれどもアナニアは神様に告げます。パウロはキリスト者を迫害し、キリスト者を捕らえるために悪事を働いています。すると、神様はこう答えられました。使徒言行録９章１５節、「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう」。神様のこの言葉がパウロの上に臨みます。パウロは命の危険が待ち受けているエルサレムへと旅立っていくのです。

主イエスの名のために選ばれた器は、主イエスの名のために苦しむのです。なぜなら、この世は主イエスに敵対し、主イエスを憎んでいるからです。ヨハネによる福音書１章９節以下にはこう記されています。新約聖書の１６３ページです。【その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。】また、同じヨハネによる福音書３章１９節以下には、こう記されています。新約聖書１６７ページ、【光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。】そしてまた、ヨハネによる福音書に出てくる告別説教の中で、イエス様はこう語っています。新約聖書１９９ページ、ヨハネによる福音書１５章１８節、【世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。】このように、キリスト者に対して世の中は厳しく迫ってきます。ところがイエス様は、告別説教の最後でこう語っておられます。新約聖書２０１ページ、ヨハネによる福音書１６章３３節、【これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。】

私たちは、主イエスの名のために苦しむ覚悟ができているでしょうか。これはなかなか一人では難しいことだと思います。けれどもイエス様は、そんな私たちのために教会を残してくださいました。主イエスの名のために、一人で苦しむことが難しい私たちに、共に主イエスの名のために働く兄弟姉妹を、教会として与えてくださったのです。私たちは、教会で御言葉をいただき、教会学校でお互いの信仰を分かち合います。そのようにして、自分一人では主イエスの名のために苦しむことが出来なくても、他の兄弟姉妹から力をいただくことができる。あるいは、苦闘している他の兄弟姉妹の力になることができる。そのようにして、私たちも主イエスの名のために共に苦闘していきたいと願います。

お祈りしましょう。